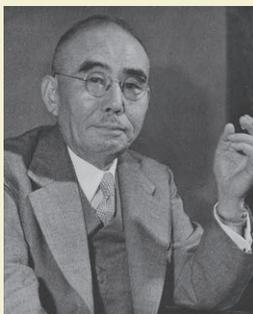
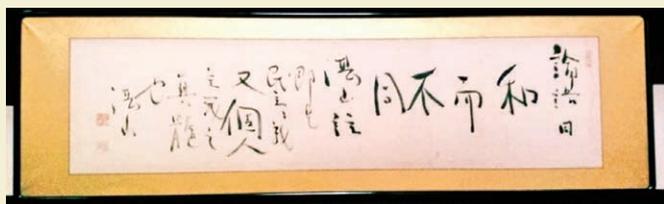


書に込められた メッセージを紐解く

やなぎだせいじ
きく市長(長野県) 柳田清二



石橋湛山 出典:ウィキペディア・コモンズ



和而不同 井出家所蔵の石橋湛山の書。『和而不同 湛山註即ち民主主義又個人主義の真髓也』

政治家が書を認める心理の探求

私が師事していた井出正二郎厚相は、大臣室に石橋湛山首相の扁額を掲げていました。ご尊父一太郎先生は、石橋内閣の農相であったことからご本人から贈られたもの。「和而不同」こそが民主主義と個人主義の真髓と断じています。この扁額には、強いメッセージが込められています。石橋湛山は戦時中に

小日本主義を主張したり、首相退任後に周恩来首相と会談し「日中米ソ平和同盟」を提唱するなど独自の発想で世にあらがひながらも和を重んじた人物です。当時の井出大臣がこの扁額を大切にしている心境も石橋湛山の伝えたい思いもよくわかります。そしてその関係に心動かされたことから以来、私は政治家の認めた書を鑑賞すること、そして収集することが一つの趣味になっていきました。

昭和天皇の心境と2人の側近が筆に込めた思い…

私が最も大切にしている書の一つに鈴木貫太郎の「四海兄弟」があります。

昭和16年9月6日。御前会議で帝国国策遂行要領が決定されました。わずかな可能性を残しながらも開戦の方向性が決定された時でしたが、その場面で昭和天皇は、明治天皇の御製を読み上げられました。

《四方の海 みなはらからと 思ふ世に
など波風の たちさわぐらむ》

「四方の世界はみな同胞のように思っているのに、なぜ波風が立ち騒ぐのだろうか」

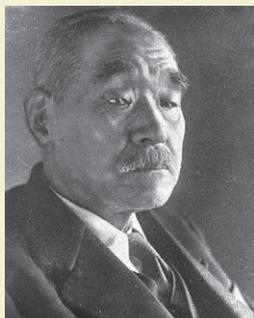
この御製は、日露戦争の開戦直前に明治天皇がお詠みになった歌です。そして日露戦争勃発直前に心境をお伝えになるために発せられたのでしょうか。

鈴木貫太郎は、昭和20年4月に大命降下。昭和天皇に請われて就任しています。極めて困難な終戦までの道筋を描いた名宰相です。鈴木貫太郎の采配について田中美知太郎(京都市大学名誉教授)の表現を借りれば「僅かに残されていた理性の一片による正気の政治決断」ということになります。

本当にありがたいことにその鈴木貫太郎が認めた「四海兄弟」をご縁あって私は、手元に置くこととなりました。そしてその箱書きには、「鈴木孝子識」と記されています。人口に膾炙(かいし)されている鈴木たかという表記



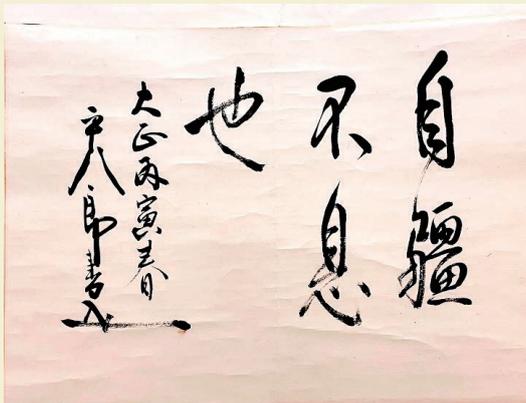
四海兄弟 終戦時の首相の認めた「四海兄弟」。昭和天皇への強い思いが感じ取れます。



鈴木貫太郎 出典:ウィキペディア・コモンズ

人は、菊池大麓帝大教授の推薦により皇孫御用掛となり、後の昭和天皇となる迪宮さまの教育係を務めた方です。4歳から14歳までの御用掛であり昭和天皇ご自身が「たかのことは母のように思っている。」と鈴木貫太郎に伝えていきます。このことから夫婦ともども昭和天皇のお近くで信頼関係を築かれていたことがうかがえます。

また、二二六事件では、鈴木貫太郎侍従長は、首謀者の1人であった安藤輝三隊に襲われました。銃弾を4発受けながらも九死に一生を得ています。たか夫人が医者を手配しましたが、その手配の際、宮中に連絡しそれが結果的には昭和天皇への事件を



自強不足也
「易経」にある自強不息という言葉に、東郷が「也」を加えた心理を読み解きます。



東郷平八郎 出典ウィキペディア・コモンズ

や三島由紀夫も選んでいる言葉です。しかし、東郷は、『也』という文字を加えています。「…である」という意味です。私は、これには、主語があるのではないかと考えたのです。

私がおもう一つ大切にしている書に東郷平八郎元帥の『自強不息也』があります。五経の易経にある言葉で、自ら進んで励み怠らない」という意味と解されています。扁額や色紙にも度々目にする言葉で、犬養木堂

『東郷は運の良い男でございます』

の内、皆兄弟なり」という言葉ではありませんが、私は箱書きをたか夫人が認めていることから自分自身の推理に行き着いたのです。



四海兄弟の掛軸箱
鈴木貴太郎首相夫人にして、皇孫御用掛であった鈴木たか。箱書の署名は鈴木木孝子と認めている。

伝える第1報になりました。鈴木たか箱書きの「四海兄弟」を認めた鈴木貴太郎の心境は、昭和天皇の昭和16年9月6日の心境を推し量りながら、陛下の思いに寄り添った一心だったのではないかと

東郷は、日露戦争開戦の前の年の1903年に連合艦隊司令長官に任命されました。その時、東郷55歳。明治天皇は、東郷は少し年齢が過ぎていてのではないかとご下問をなされると山本権兵衛海軍大臣は、「東郷は運の良い男でございます」と答えたという話が残っています。その結果、日本海海戦で当時世界屈指の戦力を誇ったロシア帝国海軍一バルチック艦隊を粉砕しました。この強運の持ち主によって日本の運命が定まったとも言えるでしょう。

私が手元に置くことができたこの「自強不息也」には、認められた年を示す記述があります。「大正丙寅」がそれです。十二支で示された年は、1926年大正15年。大正最後の年ですが、東郷にとつて特別な年でもあります。その年、東郷は大勲位菊花章頸飾を授与されているのです。

私は東郷のメッセージを紐解く作業を重ねる中で一つの推論に辿り着きました。東郷は、運が良いと言われ続けたことを潔しとしていなかったのではないかと…。そしてこの『自強不息也』の主語は『我人生』であったのではないだろうか。人は自分のことを運が良いと言うけれど、よわい78を迎え、自分自身を振り返って「自強不息自ら進んで励み怠らない人生」であったと大勲位を頂戴するときにひそかに伝えたい気持ちがあったのではないだろうか。

東郷にはこんな逸話も残っています。思



書を認める筆者
佐久市は現代書道の父・比田井天来の出生の地。毎年、「比田井天来・小琴顕彰佐久全国臨書展」が開催され、私も厚顔にも揮毫会に参加いたします。

慮深く重厚にして寡黙なイメージが東郷にはありますが、若い頃、維新の三傑に数えられる大久保利通に「東郷は口数が多い」と叱責されたというのです。以来、口を慎み多くの人々が持つイメージへと変遷していったというのです。であるが故に『我人生自強不息也』というメッセージを書き込めるにとどめ、口にすることを控えたのではないかと…。しかし、重ねた研鑽を理解してほしいという気持ちがあっても何ら不思議ではありません。

時代を超え、私が佐久市長として全国市長会機関誌『市政』という格式高き誌面に寄稿することで鬼籍に入られた東郷元帥が、「わが意を得たり」とほくそ笑んでくだされば、私の望外の喜びであります。